

赤穂・城西地区 歴史文化の視点2

2. 城をつくる－赤穂城前史－

【ストーリー】

千種川河口部は、急速に陸地化が進んだ中世になって開発が進んだ。岡豊前守によって当時の海岸線（百目堤・旧長池）沿いに「加里屋古城」が築かれ、羽柴秀吉が毛利攻めのときに整備した道を基礎として姫路街道が整備された。

江戸時代には、池田家が陸地化した河口部を城地とし、現在の赤穂城跡本丸付近に搔上城を築いた。この時にはすでに大蓮寺や万福寺をはじめとした各寺院が築かれ姫路街道、備前街道と接続し

て城下町を形成していた。隣接する中世以来の港町、中村（中庄）の存在も見逃せない。

現在の赤穂城跡は正保2（1645）年に赤穂に入った浅野長直によって築かれた。拡張された城下町の東西に惣門が置かれ、三之丸大手門枡形を整備、本丸、二之丸、三之丸の郭をもつ赤穂城が築かれた。採石場や土取り場も伝承や文献によっておおむね明らかとなっており、現在も赤穂城前史を物語る歴史文化遺産が数多く残されている。

